令和８年度 池田地区共同研究 全体総論

1．背景と教育ビジョン

(1)研究の背景：時代が求める「深い思考力」

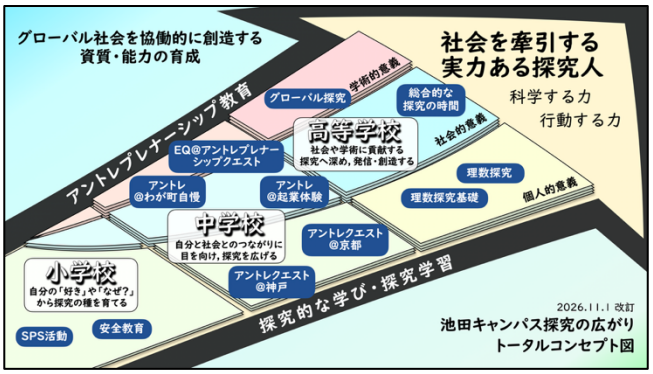
AIの急速な発展や予測困難な社会（VUCA）の到来に伴い，教育に求められる力は「暗記した知識を早く再生・アウトプットする力」から，自ら問いを立て，物事の本質を見極める「探究的な深い思考力」へとシフトしていると考える。

(2)池田地区がめざす最上位目標

池田地区一貫教育の最上位目標は，**「グローバル社会を協働的に創造する資質・能力の育成」**である。多様な人々が共存する社会において，誰か一人ではなく，みんなの「ウェルビーイング」をめざし，他者と力を合わせて新たな価値を「協働的に創造」する力の育成を追求する。

(3)研究の構造

この最上位目標のもとに，教育手法としての２つの主軸である「探究」と「アントレプレナーシップ教育」を置く。これらをもとに，子どもたちの資質・能力として真に機能させるための共通の土台として，今年度からの３ヵ年計画では「思考力」をターゲットに据える。



2．子どもたちの実態と共通課題

課題：思考力が特定の教科・場面に閉じている

2025年12月に実施した小中高合同教員アンケートの分析から，校種を問わず共通する課題として「思考力が特定の教科や場面に閉じており，別の領域や未知の場面に応用できていない」実態が明らかとなった。この課題の背景には，思考を阻む以下の「5つの姿」が存在する。

①答えを急ぐ：効率や正解を出す速さにこだわり，じっくり考えを深めるプロセス（寄り道）を軽視する。

②思考への自律が弱い：学びが他人，教員，あるいはAI任せになってしまう。

③課題を見出すことが苦手：与えられた問いの処理は得意だが，自ら問いを立て，課題を自分事化できない。

④試行錯誤が弱い：未知なるものや，正解の分からないことに対して粘り強く挑み続ける力が弱い。

⑤想定外への弱さ：想定外の突発的な状況に直面したとき，自ら判断できず思考が停止してしまう。

3．直接アプローチする介入ポイント

先の5つの姿の要因が何なのかを，分析し，下記の6つ観点で分類した。6つの観点のうち，家庭環境などの「変えられない外的要因」を嘆くのではなく，学校教育の中で直接アプローチ可能な「変えられる環境と指導（2つの焦点）」に絞った。その焦点化された課題について，各校種の実態に応じたテーマを設定し，研究をすすめている。

以下が，それぞれの校種のテーマである。

各校の研究テーマ

小学校「学びを紡いでいく子供の育成」

中学校「未知の文脈へ学びを転移させる「思考力」の育成」

高等学校「学びを社会へつなぐ自律的学習者の育成」

4．各校種における「アジャイル型」共同研究の推進

ゴール（思考力育成）は共通にしつつも，具体的なアプローチや校内総論は各校種の実態に合わせる「アジャイル型」で研究を推進する。